2–1 授業リフレクションのためのさまざまな方法
「考え方」と「方法」は一体のもの！

授業リフレクションにもいろいろある?!

第１章では、授業とはどのような営みなのか、授業リフレクションとは何をすることなのか、といったことについて詳しくお話ししてきました。私たちの授業リフレクションが前提としている「授業」のとらえ方や、それを行ううえで大事にしている考え方がご理解いただけたのではないでしょうか。

では、具体的にどのように取り組んだらよいのか、この第２章では、授業リフレクションの方法を取り上げたいと思います。

最初に表１を見てください。これは、普段私たちが用いている授業リフレクションの方法を一覧にまとめてみたものです。

いずれも私たちが独自に開発したり、既存のものを現場でより使いやすいように応用したりしたもので、これまでに数多くの実践をとおして洗練され、その有用性が確かめられてきたものばかりです。

ちなみに、表のなかにたびたび登場する「プロンプター」というのは、授業リフレクションの場で、授業者の語りを促進する「聞き手」のことです。思い出してください。前章でお話ししたように私たちの授業リフレクションは、「自分のことばで自分の授業を語る」ということを大事にしています。ですから、どの方法を用いるにしても、この「プロンプター」のかかわりを重視するのが、私たちの授業リフレクションの大きな特徴であるといってもよいでしょう。「プロンプター」のかかわりについては、方法とは切っても切れない関係にあるので、いずれまた詳しくお話ししますね。

「考え方」と「方法」は一体のもの！

表１をご覧になって、「へ〜、こんなにいろいろな方法があるのか〜」と思われた読者の方もいらっしゃるかもしれませんが、前章で触れたように、教師の意志決定や内面過程に注目した授業研究方法を総称して授業リフレクションと呼んでいるので、いくつも種類があるわけです。ですから、この８つ以外に

表 1：授業リフレクションの種類と方法

名　称	方　法
VTR を使った授業リフレクション[*1]	VTR を見る前に授業者は自分のなかに残っている授業の印象や学生の具体的な姿、自分と学生とのかかわりなどを思い出せる範囲でプロンプターに話す。次に VTR を見ながらその都度、感じたこと・気づいたことをプロンプターに話す。視聴後、VTR を見る前と後での印象に違いがあるのか、さらに、次時に向けての方針などについて、思いつくままプロンプターに話す。
カード構造化法	授業全体の印象を 1 枚のカードに表現する（印象カード）。次に授業のなかで感じたことや考えたこと、気づいたことなどを、カードに 1 枚 1 項目で書き出す。書き終えたカードを二分法で分類し、それぞれに見出し語を付け、カードがこれ以上分けられなくなるまでこの作業を繰り返す。こうしてできた見出し語を、最初に書いた印象カードの下に次元をそろえてツリー状に展開させ、完成したツリー図をもとにプロンプターと考察を行う。
リフレクションシート	授業者は授業前に「本時のねがい・目標」「当初 Plan」を記入し、授業終了直後に「See（見取ったこと）」「修正 Plan（考え直したこと）」「Do（実際に行ったこと）」を授業の流れに沿って記入する。次にこのシートをもとにプロンプターとともに振り返りを行う。その際、新たな発見や気づきがあればシートに追加記入を行う。
学びの履歴シート[*2]	毎時間、学生たちに授業のなかで気づいたこと・感じたことを、シートに自由に記入させる。単元終了後、授業者はこのシートを読み返し、各時間ごとに、その時間の学生の様子と考え合わせながら、読み取ったことを記入する。記入が済んだら、あらためて「自分が読み取ったこと」を時系列で読み返し、振り返りを行う。
「日記調」形式による実践報告[*3]	日付を付し、時系列に沿って実践の経緯を記述する。次に経緯の記述を読み返し、そこで起きていたことや学生が経験していたこと、さらに自分がしようとしていたことはなんだったのか、あるいは実際にやっていたことはなんだったのかなど、一連の実践を振り返って見えてきたことを記述する。
対話による授業リフレクション	授業全体の印象をなるべくひとことで表し、その印象がどこからきているのかをプロンプターに話す。次に時間経過に沿って授業のなかで起きていたことを思い出せる範囲でプロンプターに話す。プロンプターによって板書（あるいはノートに記録）された語りをもとに、あらためて全体を振り返り、授業の印象や次時に向けての方針などについて、思いつくままプロンプターに話す。
集団による授業リフレクション	授業者・参観者それぞれが、自分のなかで何が起きていたのか、自分自身に経験された授業の事実をなるべく時間経過に沿って白紙の紙に書き出す（セルフリフレクション）。全体の場では、この紙をもとに授業者と参観者が各自に経験された授業を出し合い、交流することで、互いに経験された授業の「違い」や「ズレ」を明らかにし、授業者の振り返りを支援する。
「参加者用振り返りシート」を使った集団による授業リフレクション[*4]	集団による授業リフレクションに先立って、参加者は自分自身に経験された授業の「事実」と「解釈・感想」をシートに書き分ける。全体の場では、「事実」の欄を中心に、そこから離れないように発言することで、互いに経験された授業の「違い」や「ズレ」を明らかにし、授業者の振り返りを支援する。

も、いろいろな人が、さまざまな方法を提案しています。

けれども、その人たちと私たちが大事にしていることが必ずしも一緒ではないので、それらを用いることが、そのまま教育実践臨床研究につながるわけではありません。つまり、教育実践臨床研究の基本となる「考え方」と具体的な「方法」が一体となって、初めて私たちのいう授業リフレクションが成り立つということなのです。この意味では、私たちの授業リフレクションも、考えなしにだだ方法だけをなぞってみても仕方がないかもしれませんね。

ところで、私と看護教育のかかわりは、1996年から神奈川県立看護教育大学校（現・神奈川県立保健福祉大学実践教育センター）の看護教員養成課程で授業を担当するようになったのが最初です。偶然ですが、小学校や中学校の先生方と一緒に、授業研究の方法として授業リフレクションに取り組むようになったのも1996年ですから、看護教育とのかかわりと同じだけの歳月、授業リフレクションにかかわってきたことになるわけです。

この間、学校教育と看護教育の別なく、数え切れないほどたくさんの現場の先生方や教員養成課程の学生さんたち、あるいは臨床の実習指導者さんや看護師さんたちと、数え切れないほどたくさんの授業リフレクションを行ってきました。そして、そうした実践の積み重ねをとおして、「教える人の教える人による教える人のための授業研究」すなわち「教育実践臨床研究」の輪郭も次第に明確になってきましたし、その方法としての授業リフレクションもより実践的に使いやすいものへと進化してきました。つまり、私たちの授業リフレクションは、よくあるように、どこかの人が考えた理論をうやうやしくもってきて、現場の実践に無理矢理あてはめようとしたものではなく、あくまでも実践の只中で、理論的にも方法論的にも鍛え上げられてきたものなのです。

もちろん、このことは今でも現在進行形です。ですから、表1に紹介した以外にも、日々現場の先生方とのかかわりをとおして、これからも新たな方法が生まれてくる可能性が充分にあるわけです。

看護教育でヒット中の方法！

表1に紹介した8つの方法は、それぞれに特徴があって、どれも甲乙つけがたいものです。用途や使う人との相性もあるでしょうから、自分に合ったものが見つけられるといいと思います。ちなみに、普段私のかかわっている小・中学校、あるいは特別支援学校の先生方と授業リフレクションを行うときには、わりと「VTRを使った授業リフレクション」や「対話による授業リフレクショ

ン」を用いることが多いように思います。

一方、看護教育では画面写りを気にする人が多いためか、「VTR を使った授業リフレクション」はあまり人気がなく、「カード構造化法」と「リフレクションシート」、そして「集団による授業リフレクション」の３つがよく用いられています。学内での講義や演習だけでなく、臨地実習も含めて、たくさんの実践が積み上げられつつありますし、学会発表まで行われている実践もたくさんあるほどです。また、とりわけ「カード構造化法」に関しては、臨床で教育に携わっている看護師さんたちによる実践も増えてきました。

そこで以降では、授業リフレクションの具体的な方法として、「カード構造化法」「リフレクションシート」「集団による授業リフレクション」の３つを取り上げ、詳しく紹介することにしたいと思います。

COLUMN

日常的な振り返りと授業リフレクションの違い

授業リフレクションについてお話ししていると、時折、「授業の振り返りならいつだってやっています。どうしてそんな方法を使ってわざわざ振り返りをする必要があるんですか？」とおっしゃる方に出会うことがあります。確かに「私は授業を振り返らないことにしています！」と豪語するような先生（第１章–2）は例外としても、日常的に自分の行った授業を振り返らない人はいないと思います。

ただ、日常的な振り返りというのは、「時間が足りなくなって予定したところまで終われなかった。次はこの続きからやらなくっちゃ」とか、「またあの学生がうるさかった。おかげで予定が変わってしまった」といったように、授業のなかで特に気になったことのみについてであったり、それこそ「なんか、しっくりいかなかった」「イマイチだった」というような漠然とした授業の感触についてのみだったりすることが多いのではないでしょうか。

また、多忙な日常のなかでは、教室を出てから教員室に戻る道すがら、そうしたことをなんとなく振り返っていたとしても、自分の席に着けば次の仕事が待ち受けていたり、一息つく間もなくそのまま実習指導に出かけたりと、終わった授業のことをいつまでも引きずっているわけにもいかないでしょう。

ここに誰もが日常的に“なんとなく”行っている振り返りと、授業リフレクションの大きな違いがあります。言うなれば、多忙な日常のなかにあって、しばし立ち止まり、授業のなかで起きていることを振り返って“ていねい”に確かめてみるのが、私たちの授業リフレクションなのです。もちろん、「毎時間、授業リフレクションをしなければならない」などというつもりはありません。でも、時には立ち止まって振り返ってみることが大切なのではないでしょうか。

2-2 カード構造化法による授業リフレクション
自分のことばで自分の授業を語ろう！

カード構造化法とは

授業リフレクションにはさまざまな方法がありますが、なかでも「カード構造化法」は、授業の印象をカードに書き出し、それを二分法で整理していくことで自分の授業の構造を明らかにするとともに、授業や学生を見る見方など、自分のもっているさまざまな枠組みを「自分のことば」で確かめていく方法です。

ここで紹介するのは、井上・藤岡[*5]によって開発されたカード構造化法を、目黒ら[*6,7]が中心になって学校現場でより使いやすいようにアレンジしたもので、前項でも触れたように、看護学校の先生方や実習指導者の皆さん、さらに、臨床で教育に携わっている看護師さんたちによる実践も増えてきています。

自分自身の日々の授業をよりよいものにしたいというのは、誰もが願うところでしょう。しかし、自分の授業の欠点を他者から指摘を受けて反省するといった、これまでの授業研究、あるいは授業評価のやり方では、自分が授業のなかで得ている実感から離れてしまい、指摘が改善につながるというよりは、授業者がやる気を失ってしまうこともしばしばでした。

そこで、皆さんにぜひ大切にしてほしいのは、自分が行った授業を素朴に振り返り、そこでの経験をあるがままに自分のことばで語ること、そして、目の前の学生と自分とのかかわりのなかで起きていたことを確かめ、気づきを得て学んでいけるような授業リフレクションです。

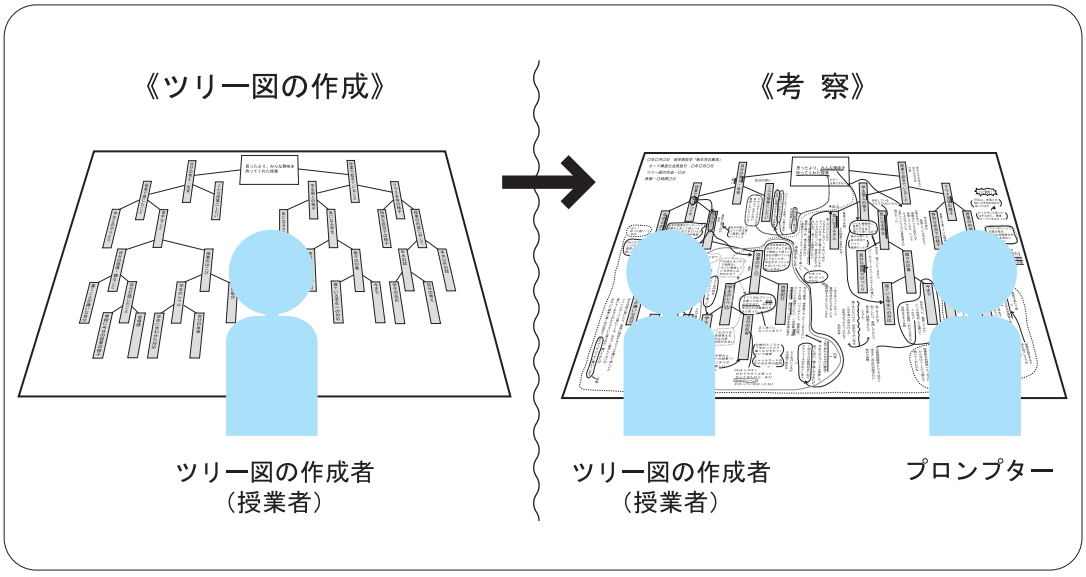
この意味で、「自分のことばで自分の授業を語る」ことに主眼を置いたカード構造化法は、そうした授業リフレクションを可能にする優れた方法の一つだといえるでしょう。

カード構造化法の手順

図１に示したように、カード構造化法による授業リフレクションは、大きく分けて「ツリー図の作成」とそれを用いた「考察」の２つの段階に分かれます。

それぞれにかかる時間には慣れや個人差もありますが、「ツリー図の作成」

図１：カード構造化法による授業リフレクション



が30～40分程度、「考察」で１時間程度とみてください。この２つの段階は続けて行うのが望ましいのですが、時間があまりない場合はカードの記入だけを済ませておいて、後から「ツリー図の作成」を行ってもよいでしょう。また、「ツリー図の作成」までを一区切りとし、後日「考察」から再開することも可能です。

「ツリー図の作成」では、作業スペースとして、大きめの紙が広げられて、周囲にカードや筆記用具などが置けるくらいの広さが必要になります。また、「考察」は、後述するプロンプターと２人で行うことになりますので、完成したツリー図を２人で並んで見られるだけのスペースが必要となります。

事前に準備する物は、次のとおりです。

- カード（名刺大の厚紙：30～40枚程度）
- ラベル（付箋紙：75mm × 14mmのものが使いやすい）
- 大きめの紙（A2判程度：A3判の紙２枚を合わせた大きさのもの）
- のり
- 筆記用具、ラインマーカー数色

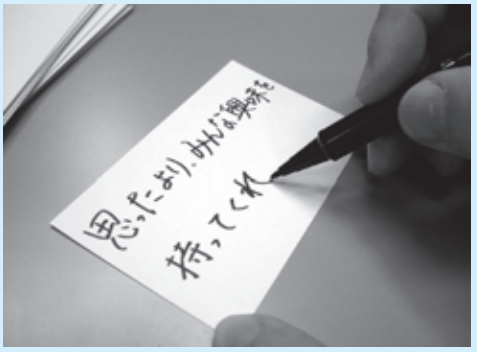
それでは、「ツリー図の作成」から「考察」の進め方までを順番に説明していくことにしましょう。

≪ツリー図の作成≫

①印象カードを書く

１枚のカードに授業全体の印象を、単語あるいは単文で書きます。「この授業をひとことで言い表せば…」と考えて、あまり難しく考えすぎずに最初に頭に思い浮かんだことばをそのままカードに書きましょう。

書き終えたら、「大きめの紙」の一番上・中央に貼ります。



②関連カードを書く

授業のなかで感じたこと・考えたことを、１枚１項目で、思いつくままにすべてカードに書き出します。この時に大事なことは、自分の感じたこと・考えたことを取捨選択せず、単語あるいは単文で、素直に書き表すことです。人に見せるためのカードではないので「これで伝わるかな？」などと気にする必要はありません。自分さえわかればOKです。

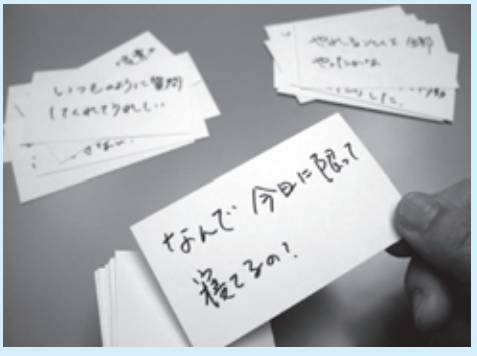


③関連カードの整理

書き出したカードをもう一度読み返し、１枚１項目になっていないカードを新しいカードに分けて書き直したり、新たに思いついたことを追加したりします。

④関連カードの分類

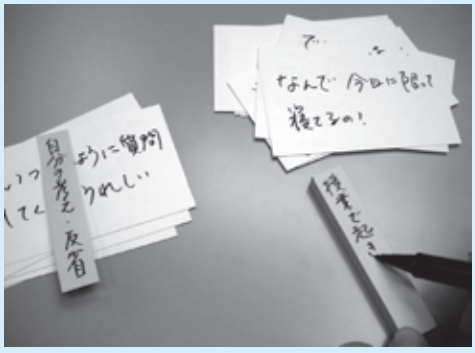
すべての「関連カード」を裏返しにしてよく混ぜたあと、ひとまとめにして手に持ちます。そして、１枚ずつ上から順に見ながら、「似ている／似ていない」「一緒にする／しない」といった単なる類似の度合いで２つの山に分けます。あらかじめ基準となる観点を用意して、それに沿って分けるようなことはしません。“直感”を大事にして分けましょう。



⑤ラベリング

分け終わったら今度は付箋紙を縦に使い、それぞれのカードの山に対して、その山をひとことで表すような「ラベル（見出し語・タイトル）」を付けます。

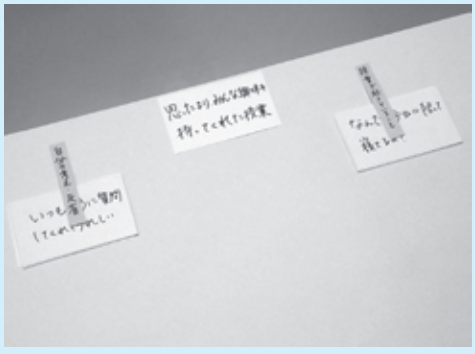
ここでは、その山に分類されたカードを見返して、その山全体から受ける“印象”や“感触”を大事にします。自分にしっくりくる表現が見つけられるとよいでしょう。



⑥ツリー図の作成

⑤で得られた「ラベル」を「印象カード」の左右、やや下に、次元をそろえて貼ります。

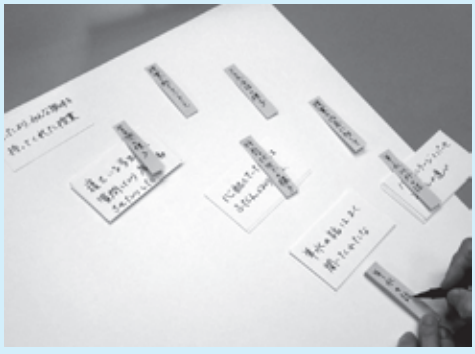
この時、関連カードとラベルの関連がわからなくなるのを防ぐために、貼り付けたラベルの下にそれぞれのカードの山を置いておくとよいでしょう。



⑦上記④～⑥の繰り返し

こうして分けられた一方の山に対して上記④～⑥の作業を行います。そして、それによってできた２つの山の一方に対して、再び④～⑥の作業を行い、さらにそれによってできた２つの山の一方に対して再び…、というようにこれ以上分けられなくなるまで同様の作業を続けます。

なお、ここからのラベルを貼る場所は、常に直前のラベルの下になります。





⑧まだ作業を行っていない山に対して、上記④〜⑥の作業を繰り返す

片方の山が最後までいったら、まだ手つかずの山に戻るわけですが、その時にも必ず「これ以上分けられない」と思うまではその山だけに作業を行ってください。

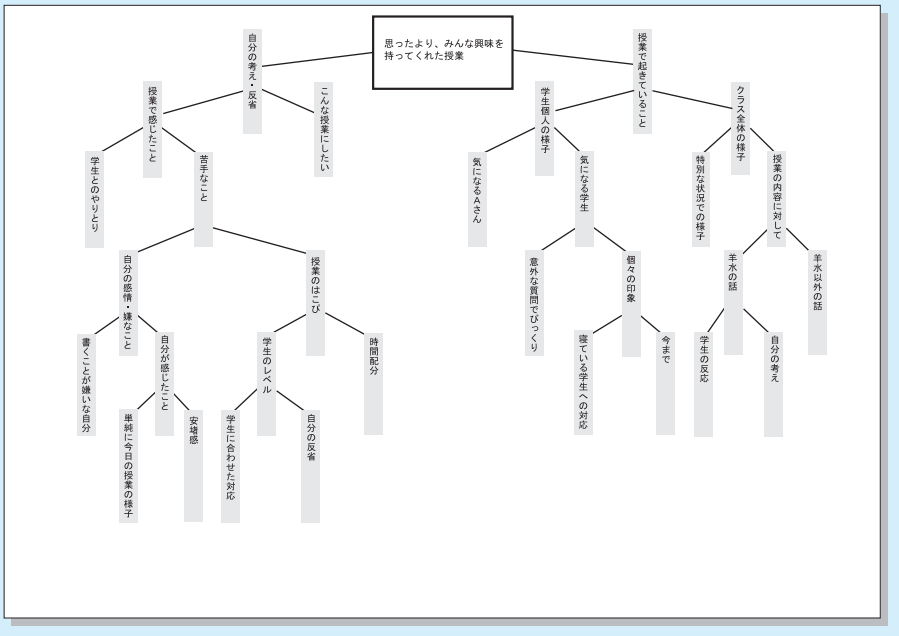


⑨ツリー図の完成

すべての作業が終了したら、関連カードが、どのラベルに分類されたカードか後でわかるように、対応するラベルとカードに同じ記号（アルファベットや数字など）を振っておくようにします。

記号を振り終わったら関連カードを片付けて、各ラベルの次元や左右の間隔がなるべく等しくなるように整頓します。ラベルは、めくれ上がらないように、しっかりのり付けしてください。

最後に、印象カードを出発点に、各次元のラベルを分かれていった順番に線で結んだら、ツリー図は完成です。

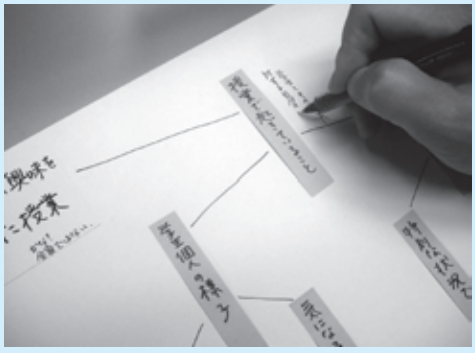


≪考察の進め方≫

「考察」は、仲間がプロンプター（語りの促進者：聞き手）として参加して、２人で行います。ツリー図の作成者は、プロンプターの助けを借りて、ツリー図上に現れた自分のことばを手がかりに、さらに自分のことばで授業を語っていきます。

①印象カードやラベルに現れたことばをプロンプターに説明する

まず印象カードの説明から始め、次にラベルの語句の説明へと移ります。ラベルの説明はツリーの上から下へと順番にたどっていくようにします。説明は関連カードに頼らずに行うことが望ましいのですが、どうしても思い出せない場合には参照してもよいでしょう。



プロンプターは、印象カードやラベルの語句を順番に指し示し、「これってどういうこと？」と作成者に説明を促したり、わからないところは「もう少し具体的に言うと？」「どうしてそう思ったのかな？」などと質問したりして、語られたことばを印象カードや該当するラベルのそばの余白に書き込んでいきます。書き込みにあたっては、解釈を交えたり、言い換えたりせずに、語られたことばをそのまま記入するようにします。

印象カードについての作成者の説明が終わったら、次のラベルは上から順に必ず２つに分岐しているので、そのつど「どっちからいきますか？」と声をかけて、話しやすいほうから説明してもらってください。上から下までいったら、まだ手つかずのラベルに戻ります。

